

症例15 残されている能力

- ・ O氏 81才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

【現在の状態】

Oは娘と長男夫婦に連れられて病院に来た。Oは「お世話になります」とニコニコしながら挨拶した。外来の診察ですることのひとつに、家族が考えている程度の認知症状態に、患者つまりOが該当しているかどうかを検討することがある。

よくあることだが、親を事実以上に重度の状態と考えている家族がいる。また、事実以上に軽度と考え、安心している家族もいる。いずれの場合も対応が不適切となり、親の認知症を進行させてしまう原因となる。

この点に注意しながらOと話を続けた結果、家族がOの状態を事実以上に重度に考えている事がわかった。

つまり、家族は「お母さんはこんなに悪くなってしまった。どうしよう、どうしよう」と絶望的になり、イライラし、Oへ必要以上の注意と励ましの言葉を繰り返していたのである。

これではOは慌てたり、混乱して、わかることまでわからなくなってしまう。つまり、半分位は分かっていることでも、全く分からない状態になってしまうのである。

Oに席を外してもらい、娘と息子夫婦と話をした。

「最近の母は本当にどうなっちゃったのかと思うくらい、いろいろなことに間違いが多くなりました」と娘が言った。嫁が続けた。「トイレを排泄物で汚してしまったり、下着を汚してしまったり……、トイレの使い方、排泄の仕方もう忘れてしまったようなのです」。

娘も「話して聞かせてもすぐに忘れてしまし、着替えもできなくなりました。先日はセーターをズボンみたいにはこうしていました。私の名前を忘れていた時もあり、情けなくて、情けなくて……」

【メモ-1】

話を聞いていて気づいたことを、家族に説明した。以下に記す。

現在、皆さんが考えるより、Oさんは良い状態にあります。しかし、皆さんの対応の仕方では認知症の進行は早くなります。このままでは、今から5、6年経った頃には、Oさんは何もわからなくなっているでしょう。

Oさんのその頃の症状は次のようになるでしょう。

- ・ 言葉の意味を忘れている。
- ・ 話しかけてもその人の顔を見つめているだけ。
- ・ 歩き回り、花・虫の死骸・消毒液などを食べたり飲んだりする。
- ・ トイレには行こうともしない。
- ・ 大便をいじる。
- ・ ベッドで了解不能な声を出している。
- ・ ポータブルトイレの中の排泄物を食べたり、飲んだりする。
- ・ ベッドの柵をゆすっている。
- ・ 布団やシーツを、一日中口に入れて噛んでいる。
- ・ 一日中大声を出している。

などのどれかです。

つまり、上記のような症状しか残っていない時期が来るのです。常識的に考えられる能力はなにもなくなります。

皆さんは、このようになるとあらかじめはいても、このような最終的な状態になれば、きっと悲しまれることでしょう。

ところで、もしこのような状態にOさんの認知症が進行してしまったとき、Oさんが現在のように大小便の排泄のためにトイレを探している姿を目にしたら、皆さんはとても喜ばれることでしょう。たとえ使用後にトイレを汚してしまっているのを発見したとしてもです。

つまり、『お母さんはトイレを使うつもりだったのね』と、Oさんの残されていた能力に感動することでしょう。他の事についても同様です。着方に間違いがあっても、衣類を着ようとする気持があり、冷蔵庫を開けて食品を食べてしまっても、ゴキブリや蟬の死骸や大便などを拾って食べてしまうよりは、皆さんは安心できるでしょう。

間違っただけでも、そのような能力をOさんが現在まだ失っていないことを、Oさんのために喜んであげてください。

今、Oさんの能力が失われていく事を悲しんでも無意味です。今から数年後から現在を振り返ってみれば、現在残されている能力、たとえその能力がまとまりを欠いていても、そのような能力をPさんが持たれていたことを皆さんはOさんに感謝されることでしょう。

【メモ-2】

私たちは年をとると、自分が年老いたことを残念に思います。したいことがあっても自分の年齢を考えて、することをためらったりします。周囲からも『トシ(老人)なんだから』と言われてたりもします。

しかし、よく考えてみると、自分に残されているこれからの人生のなかで、今が一番若い時期なのです。自分にとって、この最高に若いときを充実させないで『トシ(老人)なのだから』と、したいことを遠慮したり、しないで悲しんでいては、もっと年齢が進んだとき、振り返ってみて、きっと残念に思うことになるでしょう。

いろいろなことができなくなっていく認知症の高齢者の能力も、私たちの年齢と同じようなものだと思います。

今(現在)がこれからの将来のうちで、一番良い時期なのです。私たちがその良さを発見し、理解し、その価値を発揮させることができるかどうか問題なのです。このように対応することにより、Oさんの認知症の進行を止めたり、遅くすることができるのです。

Oさんを支える皆さんが動揺し混乱しては、Oさんに残された冷静さが傷つけられるだけになるでしょう。Oさんは今、『お世話になります』と挨拶することが出来るのです。ニコニコされる笑顔もまだまだ美しさがあります。『よかった』と思いましょよ。

ご家族は認知症を理解されたようであった。

【まとめ】

わかることが一つでもあれば、そのことを通じてあなたは高齢者と気持ちを一つにすることができる。日常生活のなかで幾つにも割れてしまっている認知能力の破片を集め、つなぎ合わせ、その人の元気な頃の思考形態・感情形態に近いものに修復できるかどうかは、我々の能力の問題なのである。

恐竜の砕けた骨片を地中から拾い出し、恐竜の骨格や姿を復元しようとしている方々もいらっしゃるのである。